

## 目次

感謝のことば  
序論  
地図

1  
12

### 第1部

個人と集団の間 ― 宗教的な体験を定義する

第1章 篠栗町における宗教体験の諸環境	15
第1節 調査地の紹介	16
1.1 海、町、田んぼと山の篠栗町	17
1.2 宗教のワンダーランド	18
第2節 宗教的ネットワークに存在する個人	22
2.1 宗教的環境の多面性	22
檀家寺と祈祷寺	24
2.2 地元の集まりと講	27
檀家の集まり―見性寺の例	27
地元の巡礼講―和田地区伊勢講の例	32
第3節 霊場としての篠栗	35
3.1 四国巡礼の「ウツシ霊場」	35
3-2 篠栗新四国霊場の歴史	38
伝説上の霊場開祖・慈忍尼	38
藤木藤助 (?-1859)	39
3-3 霊場の諸施設―中心人物と経済状況	42
ダイナミックな寺院・一番札所南蔵院	42
霊場の管理を指揮する組織	45
篠栗における「接待」の実践	48
「お遍路さん」のプラファイル	50
3-4 宗教的「需要」と「供給」の様々	51
第2章 個人の宗教的体験に関する研究	54
第1節 宗教体験の定義	54
1-1 社会と宗教	54
宗教の体験	54
現代社会にみる宗教的体験	55
第2節 宗教職能者	59
2-1 分析の基礎概念	59
〈Practitioner〉、〈pilgrim〉と〈convert〉というカテゴリー	59
現代社会における「信ずること」の認識・Danièle Hervieu-Léger による分析と概念	61
2-2 〈Religious virtuoso〉という概念	64
〈ヒト〉のカリスマと〈機能〉のカリスマ	64
日本民俗宗教におけるカリスマ的人物	65
2-3 ライフヒストリーと〈exceptional typical〉	68
宗教職能者のライフヒストリー	68
個人を中心にした研究	72
第3節 「個人」の定義の再考へ	73

3-1 対立しない両極：個人と仲間	74
ネットワークの中心に立つ個人	75
3-2 「個人」の定義要素とその解釈	77
個人とは何か	77

## 第2部

### 宗教職能者と信者の間

81

### 第3章 「血の縁」と「名の縁」―師匠と弟子のつながり

82

第1節 僧侶になる過程	84
1-1 信者・檀家の期待と僧侶の応対	84
僧の仕事	84
1-2 得度のこと	86
1-3 寺院の住職	88
跡継ぎの問題	88
養子のステータス	89
女性住職の場合	92
1.4 女性宗教的職能者の立場	92
女性の宗教性	92
頭を剃った女性と頭を剃らない女性	93
28番札所大日寺住職たちの例	96
法系の優位	98
第2節 得度で得られるもの	100
2-1 拝み屋さんの場合	100
「口開き」と得度	100
安河内淳子の事例	101
2-2 俗人の場合	103
師匠とのつながり	104
赤ん坊と死者の「仏性」を高くする儀式	104
新しいステータス	105
2-3 「名の縁」の重要性	108
得度が語る法系	108
庄崎良清の例	109
国宗妙夏の例	109
名の変容	110

### 第4章 行者と拝み屋さんの宗教体験

115

第1節 模範的拝み屋さんたち	116
1-1 拝み屋さんのオファー	116
「判じ」というお告げと占い	116
セラピーの技術	117
1-2 拝み屋さんの宗教観	121
神と仏	121
オリジナル宗教的再構築	123
民俗宗教と「新霊性文化」	129

第2節 周縁化のものと他者性	130
2-1 靈感による周縁化	130
2-2 道を探し出すきっかけ	134
不幸と人生の断絶	134
「お寺に関わる時代」	136
最後の手段として	137
第3節 新しいアイデンティティへ	138
3-1 意味を求めて	138
家族環境	138
家族にあるモデル	140
3-2 決定なる出会い	142
霊地の発見	142
師匠の人格	144
3-3 修行ルート	145
修行の実践	145
修行場の役割	145
修行で得られるもの	147
第4節 新しいアイデンティティを得た後	152
共同体のために験力をつかう	152
修行を止めた人たち	153
拝み屋さんにならない人たちの場合	154

## 第5章 行者・拝み屋さんのお告げ・「判じ」を求める人たち

	157
第1節 こころの悩みを解読して	157
1-1 尋ねて来る人々の諸問題の類型	157
引きこもりと鬱病	157
憑依と憑物	159
1-2 拝み屋さんが提供する意味付け	163
悩みの原因探し	163
供養・法事の力	165
憑物と死霊	167
神懸かりになりやすいひと	172
第2節 拝み屋さんの側にいるひと	173
2-1 モデルなるひととの出会い	173
2-2 修行の意味と内容	175
修行をさせる意味	175
日常生活から離れる	177
悩みごとが無くならない人たち	180

## 第3部

### ソトとウチの間——巡礼空間における個人的宗教体験

187

## 第6章 遍路という体験

	188
第1節 〈自分探し〉を意味する巡礼	188
1-1 巡礼とツーリズム、信仰と観光	188
1-2 様々な巡礼動機	191

1-3	篠栗における遍路の実践	193
	南蔵院の寒行	196
	地元の巡礼者	201
	観光巡礼の立場	201
	一人で巡る人たち	204
第2節	なぜ人は巡礼者になるのか?	208
2-1	モデルになった人たちの役割	208
	家族物語に現れた巡礼者のイメージ	208
	モデルなし	211
2-2	動機ときっかけ	211
	供養遍路	212
	「哲学遍路」	212
2-3	案内者の役割	213
	家族	213
	友達	213
	僧侶	213
	宗教職能者・行者	214
2-4	巡礼者が考える巡礼・自省	216
	組織を使う	216
	「自分のやり方」	219
第3節	巡礼空間における社会関係	219
3-1	巡礼者家族の反応	219
	巡礼者家族	219
	家族のサポート	220
	家族が応援しない場合	220
3-2	新たな人間関係	221
	札所に習うもの	221
	巡礼と出会い	222
	札所と札所の間—交換空間になるへんろ道	224
第4節	巡礼者アイデンティティの多面性	225
4-1	巡礼者が見せたいアイデンティティと他者が見るアイデンティティ	225
	巡礼者のアイデンティティと宗教観	225
	遍路と「へんど」・「よい巡礼者対悪い巡礼者」	226
4-2	自分なりの巡礼	230
	身体で見せるもの	232
	勤行の唱え方	232
	身体と空間に印を付ける	233
第7章 祀るヒトと祀られるモノ—信仰の個人的実践		240
第1節	モノと人間	245
1.1	篠栗における宗教的な彫像の風景	245
	神々と死者を現す神仏像	245
	空間と時間に印を付ける	250
1.2	特別なモノとしての宗教的な彫像	252
	<b>神仏像</b> のなかにあるもの	252
	宗教的なモノを作る	252
第2節	モノを信仰対象ににする過程	254
2.1	仏像を捧げる理由	254
	「信仰あゆみの物語」—— 神仏像創造のもと	254
	<b>仏師という仕事</b>	255
2.2	「タマ入れ」儀礼	259
	「開眼作法」	259

「タマを抜く」こと	261
2.3. 信仰対象になれる仏像を求めて	263
捨られた仏像	263
自分の仏像の発見	265
念ずる力	268
第3節 〈他界〉に影響する方法	270
3.1 縁をつくる供え物	270
行動の繰り返し	270
人間のように信仰対象を扱う	273
縁をむすぶ	276
現世にあるもの、他界にあるもの	278
3.2 「念をとばす」	281
供物と利益の等価関係	281
理想的な分身	281
子供になった人形たち	285
第4節 信仰の日常とその結果	290
4.1 信仰対象から得る「ご利益」	290
神妙な「ご縁」	290
<b>信仰対象の個人化の終極</b>	291
4.2 物体と靈魂	292
信者と <b>信仰対象間</b> の魂の関係性	292
なかにあるものは何か	294
<b>結論</b>	299
<b>参考文献</b>	
<b>別紙</b>	303
	325
1. インフォーマントリスト	327
2. 篠栗八十八ヶ所霊場の札所と番外	335
3. 用語	345